

9月の栽培管理

リンゴ

○生育状況

県南部における果実肥大は、「つがる」、「王林」で平年並み、「やたか」、「ふじ」で平年よりやや小さい。いずれの品種も酸度が平年より低い（表1）。

表1 県南部のリンゴの生育状況（果樹試験場：9月1日現在）

品 種	調査項目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年	前年
つがる	果重(g)	276.0	278.2	282.2	99%	98%
	縦径(cm)	7.63	7.83	7.88	97%	97%
	横径(cm)	8.91	8.82	9.06	101%	98%
	硬度(lbs)	12.8	14.0	14.1	91%	91%
	糖度(Brix%)	13.4	11.9	11.8	113%	114%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.270	0.325	0.298	83%	91%
やたか	果重(g)	222.5	272.7	245.2	82%	91%
	縦径(cm)	7.05	7.71	7.58	91%	93%
	横径(cm)	8.14	8.70	8.51	94%	96%
	硬度(lbs)	15.7	15.9	15.6	99%	101%
	糖度(Brix%)	10.3	11.2	10.6	92%	97%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.388	0.491	0.467	79%	83%
王 林	果重(g)	234.7	211.6	232.5	111%	101%
	縦径(cm)	7.69	7.47	7.61	103%	101%
	横径(cm)	7.90	7.53	7.82	105%	101%
	硬度(lbs)	20.0	19.9	20.1	101%	100%
	糖度(Brix%)	9.4	10.6	10.2	89%	92%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.369	0.416	0.425	89%	87%
ふ じ	果重(g)	177.9	217.1	203.8	82%	87%
	縦径(cm)	6.53	7.03	6.71	93%	97%
	横径(cm)	7.48	7.97	7.78	94%	96%
	硬度(lbs)	25.0	20.4	20.7	123%	121%
	糖度(Brix%)	10.3	9.8	9.4	105%	110%
	リンゴ酸(g/100ml)	0.332	0.455	0.387	73%	86%

※平年値は平成25～令和4年（10か年）の平均値

1 中生種、晩生種の収穫予想と着色管理

本年は夜温が高いため、「つがる」の着色は不良であるが、収穫期を迎えている。着色を待ちすぎて軟化させないように、自園地の状況を確認して選りもぎを進める。

中生種の成熟は平年よりやや早く、晩生種の成熟は平年並と予想される。ただし、この後の気象条件により収穫期が前後するため、収穫の際は外観だけでなく、必ず食味を確認して判断する。

葉摘み作業は、中生種では収穫開始の20日前頃から、晩生種は30～40日前から2回に分けて行う（表2）。1回目は果そう葉を主体に果実周辺の葉を軽く摘み取る程度とし、2回目は中生種では収穫2週間前頃から、晩生種では3週間前頃から新梢葉も含めてやや強めに葉摘みを行い、同時に玉回しも行う。

また、徒長枝の剪去や枝吊り、支柱入れは日当たり状況を見ながら随時行う。特に、「やたか」は果実が大きく、枝折れなどが心配されるので、こまめに枝吊りを行う。

表2 リンゴ中・晩生種の摘葉時期（県南部）

品 種	摘葉時期		収穫時期 （予想）
	第1回目	第2回目	
やたか	9月7日頃から	9月13日頃から	9月27日頃から
秋田紅あかり	9月15日頃から	10月1日頃から	10月25日頃から
ふ じ	9月25日頃から	10月15日頃から	11月5日頃から

2 見直し摘果（樹上選果）

現在、果実肥大が進み、個体差が明確になっていることから、肥大が劣る果実や著しい変形果、さび果、病害虫による被害果などを摘み取る。果こうの異常、こうあ部の浅い果実、果台が異常に長い果そうの果実は、着色不良果や小玉果、青実果になりやすいので摘み取る。

「やたか」、「シナノスイート」では、着色や地色の黄化が他より著しく早い果実は心かびが発生していることが多いため、収穫2週間前までに摘み取り、心かび果の混入を防止する。

3 台風対策

事前対策として防風網の設置や主枝、垂主枝など大枝には木柱を入れ、結束固定を徹底する。わい性台木や幼木は、支柱の強度を確かめるとともに、結束部位の点検・補強を行う。枝が大きく振られることによる落果等を軽減するため、側枝の枝吊りを行う。

台風の接近により落果が懸念される場合、収穫期に入った果実は風が強くなる前に熟度を確認しながら収穫する。

格納庫や作業舎の周辺を整理するとともに、出入り口の点検と補強を行う。

4 鳥害対策

カラス等による果実の食害は成熟や着色の進行に応じて増加するので、早めに防鳥糸を張るなどの対策を講じる。

5 秋肥の施用

肥料は果樹化成や尿素等速効性肥料を施用する。施肥量は、水田転換園や県南部の黒ボク土園の場合、窒素成分で2～3 kg/10 a、傾斜地や県北部の園地で3～4 kg/10 aを標準とし、自園の樹勢と着果量から施肥量を調整する（表5）。

施肥時期は「さんさ」、「つがる」などの早

表3 樹勢による施肥量の加減

樹勢	窒素施用量の対応
強い	不要
やや強い	半減（標準1/2）
適正	標準量
弱い	やや多め（標準+2 kg）

生種は9月上旬、「やたか」など中生種は9月中旬～下旬に、「王林」、「ふじ」など晩生種は9月下旬～10月上旬に施用する。

6 「ふじ」への摘葉剤の散布

本年の県南部での「ふじ」の収穫時期は11月5日頃からと予想されるので、摘葉剤の散布は9月15日頃を目安とする（表4）。散布当日から最高気温が25℃以上の日が2～3日続く日に散布すると効果が高いので、天気予報を参考に散布日を決定する。

摘葉剤の効果は散布1週間後から葉が黄変し、約2週間で落葉は終了する。その後、必ず手作業による摘葉を行って仕上げる。

衰弱樹や病害虫被害の著しい木では過剰に落葉する恐れがあるので使用しない。

表4 「ふじ」の摘葉剤の使用方法

剤名	使用時期	使用回数	希釈倍率	展着剤
ジョンカラープロ	収穫前40～50日前	1回	500倍	加用*

*果面の汚れ防止と低温時の効果安定のため、展着剤を加用する。

ブドウ

○生育状況

「キャンベル・アーリー」は、糖度が高く減酸も進んだため、収穫期は平年より17日早い8月18日に、「巨峰」の収穫期も平年より早い9月1日（平年：9月23日）となった。「シャインマスカット」も、9月1日現在の酒石酸含量、糖度から平年より早い9月7日頃（平年：9月20日）と予想される。ただし、収穫期は今後の天候次第で前後する可能性があるため留意する。

表1 県南部のブドウの生育状況（果樹試験場 9月1日現在 キャンベルのみ8月18日）

品 種	項 目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年	前年
キャンベル・アーリー 収穫始期 8月18日 (平年比-17日)	1粒重(g)	6.0	5.8	5.8	104%	103%
	果皮色(C.C 0～12)	10.8	10.5	8.5	102%	126%
	糖度(Brix %)	16.1	15.2	14.9	106%	108%
	酒石酸(g/100ml)	0.624	0.541	0.559	115%	112%
巨 峰(無核) 収穫始期 9月1日 (平年比-22日)	1粒重(g)	11.4	13.4	12.4	85%	92%
	果皮色(C.C 0～12)	7.9	7.9	8.0	100%	98%
	糖度(Brix %)	17.9	17.8	16.5	100%	108%
	酒石酸(g/100ml)	0.535	0.527	0.653	101%	82%
シャインマスカット	1粒重(g)	12.4	11.5	11.4	108%	108%
	果皮色(C.C 1～6)	3.6	3.4	3.5	106%	101%
	糖度(Brix %)	18.2	16.1	16.1	113%	113%
	酒石酸(g/100ml)	0.282	0.409	0.507	69%	56%

※平年値は平成25～令和4年（10か年）の平均値。

※果皮色の判断は農林水産省果樹試験場基準果実カラーチャートのブドウ紫・黒色系カラーチャート値（C.C：0～12）及び黄緑色系カラーチャート値（C.C：1～6）を使用。

1 収穫の注意点

7月下旬以降の高温の影響で日焼け果が多くみられているため、収穫前に一度除袋し、裂果した果粒を取り除くようにする。

本年は着色指数、糖度とも高い状況であるが、収穫時は外観、食味を十分吟味して行う。同一品種でも園地環境や果房の大きさ等により成熟が異なるので、熟度を確認して枝の先端や日当たりの良い部分の果房から選りもぎをする。

「シャインマスカット」の熟度を秋田県版カラーチャートを用いて判定する場合、直射光を避け、日陰で比色する。なお、夕暮れ時は正確に判定できないので使用しない。

糖度18%以上の果房を得るには、果房の陰光面中央部で指数4が目安となる。ただし、700g以上の大房には、当てはまらない場合が多いため、必ず食味を確認して収穫期を判断する。なお、このカラーチャートは青色袋の使用を前提としているため、他の有色袋を使用している場合は色調が異なることに留意する。

果実や果実袋が濡れた状態で貯蔵するとカビや裂果発生の原因となるため、収穫は降雨中や降雨直後を避け、晴天が続いた後に行う。また果実の鮮度保持のため、涼しい時間帯に行い、果粉を落とさないように穂軸を持って収穫する。なお、切り残した穂軸は、晚腐病などの越冬伝染源になるため、基部から切除する。

9月は台風の接近が多くなる時期である。気象情報に注意し、台風の襲来に備え、事前に棚や支柱、ハウスの補強を行う。

2 出荷前の房調整

以下に示すような障害果粒は出荷前に取り除き、果房を調整する。

- ・日焼け果粒：樹冠外周部など日当たりの良い果房の陽光面に多い。
- ・縮果症：「シャインマスカット」など黄緑色品種で目立つ。
- ・未熟果粒：「シャインマスカット」で早期から多く見られ、成熟果粒に比べ小さくて果皮の緑色が濃くて硬く、成熟に至らない。

○生育状況

県南部の「川中島白桃」の果実は平年より大きい（表1）。また、収穫は平年よりやや早く始まったが、高温のため成熟が遅れ、収穫盛期は平年より2日遅れた。

表1 県南部のモモの果実品質（果樹試験場：9月1日現在）

品種	項目	計測値			対 比	
		本年	平年	前年	平年	前年
川中島白桃 収穫盛期 9月1日 (平年比+2日)	果重(g)	367.4	335.9	352.8	109%	104%
	縦径(cm)	7.88	7.79	7.92	101%	99%
	横径(cm)	8.66	8.51	8.60	102%	101%
	側径(cm)	9.08	8.78	9.08	103%	100%
	硬度(kg)	1.10	1.54	1.25	71%	88%
	糖度(Brix %)	16.6	14.8	11.9	112%	139%
	pH	4.65	4.48	4.37	104%	106%

※平年値は過去10か年の平均値

1 秋肥の施用

秋肥は葉の光合成を活発にして同化作用を高め、枝、幹、根への養分の蓄積を促す。この貯蔵養分は耐凍性を高めるとともに翌年の初期生育に用いられる。10月以降は葉の活性が低下し根の養分吸収量も低下するので、秋肥の効果を得るためには、速効性の果樹化成を遅くとも9月中に施用する。遅効性の有機質肥料を使用する場合は、9月15日頃までに施用する（表3）。

なお、新梢の葉色が濃く、新梢伸長の停止が遅く、副梢の発生が旺盛な場合は、施肥量を基準より少なくするか無施肥とする。

表3 モモの秋肥施用量

樹 齢	窒素施肥量 (成分kg/10a)
成木	4 ～ 5
8 ～ 9	3 ～ 4
7 ～ 6	2 ～ 3
4 ～ 5	1 ～ 2

2 秋季剪定

秋季剪定は、翌年に残すべき枝にしっかりと光を当て、翌年の花芽や結果枝の充実を図るために行う。

剪定する枝は、主枝や側枝など重要な枝に日陰を作るような強勢な枝や、主枝、亜主枝、側枝の基部から発生している強い徒長枝などである。ただし、切りすぎると樹勢の低下を招くので、最小限の剪定量とする。また、太枝を切る場合は切り口からの枯れ込みを防ぐため、発出基部より15cm程度残して剪除する。

剪定は収穫が終了してから9月20日頃までに終える。9月20日以降に収穫する品種では収穫終了後速やかに秋季剪定を行う。切り口の保護のため、剪定後は必ず塗布剤を塗る。